

ギーに役立たせ始めたから、わたしは自分の支持者に対して、もっとも重要な外交政策問題、つまり対ロシア関係を特別に扱い、そしてこのことが一般の理解に必要であり、またこのような著作のわくの中で可能な限り根本的に扱うことが義務であると感している。

国家の領土の意味

わたしはここでなお一般的に次のことを前置きしておきたい。

つまり、もしわれわれが外交政策という言葉をもって、一国民の他の国々に対する関係の調節を理解すべきであるとするなら、調節の方法はまったく一定の事実によって制約されるに違いない。国家社会主義者としてわれわれは、さらに進んで民族主義的国家の外交政策の本質について、次のような命題を提出することができる。

つまり、民族主義的国家の外交政策は、一方では国民の数およびその増加と他方では領土の大きさとおよびその資源との間に健全で、生存可能であり、また自然的でもある関係を作り出すことにより、国家を通じて総括される人種の存在をこの遊星上で保証すべきものである。

この場合健全な関係というのはつねにただ一国民を自己の領土でもって確実に養うことのできる状態であると理解してよいだろう。たとえ数百年も、いや数千年続いたとしてさえも、これ以外のあらゆる状態はそれにもかかわらず不健全であり、その国民が絶滅しないとしても、いつかは損害をこうむるだろう。

この地上でじゅうぶん大きな大きさの区域を占めることだけが、一民族に生存の自由を保証しうるのである。

この場合、定住地域に必要な大きさはただ現在の要求だけから判断されることはできない、いや、民族の数からはじき出された土地利得の大きさをからもけつて判断されてはならない。なぜなら、わたしがすでに第一巻で「戦前のドイツ同盟政策」の見出しの下に詳しく述べたように、一国家の領土には一国民の直接的な生計の資を与えるという意味の外に、なお他の、つまり軍事政策的意味もつけ加わるからである。たとえ一民族がその領土の大きさによって自己の食物そのものは確保したにしても、それにもかかわらずやはり現在の領土自体の安泰を考慮することも欠かすことができない。国土の安泰は国家の一般的な強力政策の強さに依存しているが、後者はさらに軍事地理的観点によって決定されることが少なからずあるのだ。

領土の大きさと世界強国 したがって、ドイツ民族は世界強国となることによってのみ自己の将来を擁護することができるだろう。わが国の外交政策活動について多かれ少なかれ成功だったと呼ばれるに違いないような、二千年近くわが民族によってなされた利益擁護が世界史であった。われわれ自身はこの証人である。なにしろ一九一四年から一九一八年までの巨大な民族間の格闘は、ドイツ民族が地球上での自己の存在をかけての格闘に過ぎなかったからである。だがこの場合、われわれは経過そのもののこの様式を世界大戦と呼んでいる。

ドイツ民族はひとりよがりの世界強国としてこの闘争に出場した。わたしはここで、ひとりよがりというが、それは実際にはそんな強国ではなかったからである。もしも、ドイツ民族が一九一四年にもっと違った領土と人口の関係をもっていたと仮定されるならば、ドイツは実際世界強

国家社会主義の歴史的使命

このように今日地球上に、民族人口の点で、まずわがドイツ民族の勢力をはるかに越えるだけでなく、とりわけ面積の点で、政治的強国の地位を支える最大の柱石をもっている多数の強国をわれわれは見出す。その上、面積と民族人口から計るならば、ドイツ国が他の登場してきている世界的大国に対してもつ関係は、二千年前のわが国の歴史の始めほどに、そしてまた再び今日ほどに、不利だったことはけつしてないのだ。当時、われわれは若い民族として、疾風のように崩壊しつつあった大国家組織の世界へ侵入し、その最大の巨人ローマを殺害することをわれわれ自身手伝ったのである。今日では、われわれは形成されつつある大強国がひしめく世界の中にいるのであり、この世界でわれわれ自身の国家はますます無意味な存在に没落してゆくのである。

われわれはこの苦々しい真実を冷静にまたまじめに考えることが必要である。またわれわれは、ドイツ国の民族人口と面積が他の諸国に対してどのような関係にあったかを、数百年にわたって追求し、比較することが必要である。そうすればだれでもが、わたしがこの考察の始めにすでに語ったこと、つまり、軍事的に強力であるうが弱体であるうが、それとは無関係に、ドイツはもはや世界強国ではないという結論に到達してびっくり仰天するだろう、とわたしは予想している。わが国は地球上の他の偉大な諸国家とはまるっきり比較にならない状態に陥っている。この状態はまったく、外ならぬわが民族のあわれな外交政策指導層のお陰によるものであり、かれらが特定の外交政策目標に対し、先祖の遺言的な——わたしはほとんどそういいたいのだが——確固

たる態度が完全に欠けていたお陰であり、さらには自己保存の健全な本能と衝動をすべて喪失していたからに外ならない。

もし国家社会主義的運動がほんとうに歴史の前で、わが民族のために働くという偉大な使命にたいして祝詞を授かりたいと望むならば、この運動は、この地球上でのわが民族のありのままの状態を徹底的に認識し、また苦痛をじゅうぶんかみしめながら、今までわがドイツ民族を外交政策の進路で導いてきた人々の無目標と無能力に対して、大胆にそして目標を自覚しつつ闘争を引き受けなければならない。さらにこの運動は、「伝統」や先入見にこだわることなく、生活圏の今日の狭さからこの民族を新しい領土に導き出し、それによってまたこの地上で滅亡、あるいは奴隷民族として他の民族の専任に心を煩わさねばならぬ危険から永久に解放されるような道を進むするために、わが民族とその勢力を結集する勇気を出さねばならない。国家社会主義運動は、わが民族の人口と面積の間のふつりあい——後者は糊口の道と強力政策の支点と見なされる——や、わが国の歴史的過去と希望がもてぬわれわれの現在の無力さとの間のふつりあいを取り除くように努力しなければならぬ。この運動は、その場合、われわれがこの地上における最高の人類を守るものとして最高の義務も課せられていることを忘れてはならない。そして、運動はドイツ民族が人種的な迷いから覚め、犬、馬、ねこなどの種の外に自分の血にもあわれみを感じるように心を配れば配るほど、ますますこの義務を果たすことができるのである。

わたしは今までのドイツの外交政策を無目標で無能だと特色づけたが、わたしの主張に対する

Lebensraum

創、本以外、領土保持不可

1 つまり、スローガンをクラブの夕べでの幻想の中から実現化するような強力な手段が欠けているし、また

2 スローガンが実際に実現されるとしても、なおその結果はまたもや非常にみじめなものであるうし、それゆえそのために新たにわが民族の血を賭けることは、誓って利益でないはずである。なぜなら、一九一四年の国家の回復できえも血によってのみ達成されるに違いないことは、ほとんどどんな人間でも疑うようには思えないからだ。子どもじみた素朴な頭の持主でなければ、はいつくばったり物請いしたりするやり方でヴェルサイユ条約の修正をもちたすことができる、などという考えにふけることは不可能だろう。そのような修正の企てには、われわれドイツ人が所有していないタレーラン⁽³⁾の人間性を必要とするに違いない、ということを完全に無視してもやはりそうなのである。わが国の政治家の半数は、非常に抜け目がないが、また同様に無節操であり、一般にわが民族に敵対的な意見をもつ分子から成立している。他方、残りの半数は善良なお人よしで喜んで人の意に従うようなばかり者どもから構成されている。それに加えて、時代というものはヴェーリン会議以後変化してしまつたのである。つまり、王侯や王侯の側室が国家の境界を掛値販売をしたり、値をつけたりしているのではなく、無慈悲な現世主義者ユダヤ人が諸民族の征服を目指して戦っているのだ。どの民族も剣による以外には自分達ののどからこのごぶしを離れさせることはできない。ただ力強く反抗に立ち上る国家主義的熱情が集結され、集中されて發揮する力だけが、国際主義的な民族の奴隷化に挑戦できる。そしてこのような事件は、変ることなくつねに血を見なければならぬ。

それにもかかわらず、ドイツの将来はどっちみちすべてを賭けることを要求している、という確信がもしも正しいとすれば、政治的策略の考慮そのものなどはすべて完全に無視しても、すでにこのようにすべてを賭けるためには、それにふさわしい目標が設定され、また擁護されなければならぬ。

一九一四年の国境はドイツ国民の将来にとってなんの意味もない。その国境は過去にドイツを守らなかつたし、将来における勢力も保証していない。ドイツ民族は、その国境によって自国の内部統一を維持できないだろうし、それによって自民族を養うことも保証されないだろう。またこの国境は、軍事的な観点からみても目的にふさわしくないもの、あるいはただ満足させることさえもしないもののように思われた。最後にまたこの国境は、われわれが現在他の世界列強、あるいは一層適切に表現すれば、本物の世界列強に対して維持している関係を改善することもできない。ギリシアとの間隔も縮められないし、アメリカ合衆国の大きさにも到達できないのだ。いやそればかりか、フランスも自国の世界政策的な重要性の本質的な削減などけつしてこうむらぬに違いない。

ただ一つだけ確実であるだろう。つまり、もつとも有利な結果となつてさえ、一九一四年の国境回復のそのような企ては、わが民族体の一層ひどい流血に導くに違いない。しか、その流血は、国民の生活と将来を真に保証する決意や行為を行なうため注入すべき貴重な血液がもはや存在しなくなつてしまふかも知からないほどのだ。いやその反対に、そのような中味のない成功に有頂点になつてしまひ、「国民の名譽」はとにかく回復されたし、商業の発展にとつては少なくとも

この血は... 血は... のみ

ドイツ民族が今日考えられぬほどの小さな面積の土地にすし詰めになれながら、みじめな将来に向かって進んでいるとしても、このことがけつして運命の命令ではないように、そんな将来に逆することもまた運命を粗末に扱うことをけつして意味しないのである。それは、あるなにかより強大な権力が考えられて、それがドイツ民族より他の民族により多くの領土を与える約束をしたというようなことはないし、現在のような不正な土地配分の事実によってそうした権力が侮辱を受けているといったこともないのとまったく同じである。われわれの先祖達はわれわれが今日生活している土地を天から贈られて保持したのではなく、生命を賭けることによって戦いとらねばならなかったと同じように、将来われわれに土地、したがってわが民族の生活を割り当ててくれるのは民族に対する思ちようではなく、無敵な剣の力だけなのである。

今日どれほどわれわれがフランスとのあらゆる面での対決を急務であると認識しているとしても、もしわが国の外交政策目標がそれだけに終ってしまつてすれば、その対決は大体において無効なものであり続けるに違いない。その対決はただ、ヨーロッパでのわが民族の生活圏を拡大するための背面掩護をもたらずものである限り、意味をもちうるものであり、また実際にもつに違いない。なにしろ、われわれはこの問題を解決するには、ただ植民地を獲得すればよいと考えてはならないのであり、母国の面積そのものを増し、それによって新しい移住者を本土との緊密な結合の中に維持するだけでなく、両者の結合の偉大さの中に存在する利益を全地域に保証するような移民領域を獲得することにもつぱら問題解決はかかっているからである。

民族主義的運動は他民族の代理人であつてはならず、自身の民族の先ぼうでなければならぬ。

そうでなければその運動は余計なものであり、またとりわけ過去について不平をいう権利など少しもないのである。なぜなら、そうでない場合には、その運動は過去と同じことを行なうからである。旧ドイツ国の政治が誤つて王朝的観点から決定されたと同じように、将来の政治は民族についでに平凡な感傷癖によつて導かれてはならない。だがとくに、われわれは周知の「あわれな諸々の小民族」の保安警察官ではなく、われわれ自身の民族の兵士なのである。

しかしわれわれ国家社会主義者はまだ先に進まなければならぬ。つまり、もし領土拡張ができぬとすればある大民族が没落せねばならぬように思われる場合、領土に対する権利は義務と変わりうる。その際任意のネグロ小民族が問題ではなく、現在の世界に文化的素描を与えた全生活の母であるゲルマン民族が問題になっているとすれば、まったくそのことは特に妥当性を深めるのである。ドイツは世界的強国になるか、あるいは全然存在できないかのどちらかである。しかし、世界的強国になるためには、今日ドイツに必要な意義を与え、その国民に生活を与える国土の大きさが必要である。

*

東国政策の再開

以上でもって、われわれ国家社会主義者は、わが国戦前の外交政策について

ては終止符を打っておくことにする。われわれは六百年前に到達した地点から出発する。われわれはヨーロッパの南方および西方に向かう永遠のゲルマン人の移動をストップして、東方の土地

に視線を向ける。われわれはついに戦前の海外植民地政策および貿易政策を清算し、将来の領土政策へ移行する。

だが、われわれが今日ヨーロッパで新しい領土について語る場合、第一にただロシアとそれに従属する周辺国家が思いつかれるに過ぎない。

この場合、運命自体はわれわれに暗示を与えようと望んでいるかのようと思われる。ロシアはボルシェヴィズムに引き渡されたことにより、それまでこの国家を存立させ、またその存立を保証してきた知性がロシア民族から奪われてしまった。なにしろロシア国家の構造組織はロシアにおけるスラブ民族の国政能力の結果ではなく、むしろ低級な人種の内部に存在するゲルマン民族的要素による国家形成活動の驚くべき一例であるに過ぎない。地上の数多くの強国はこのようにして建設されたのである。ゲルマン民族の組織者や支配者を指導者にもつ劣等民族が巨大な国家構造に膨張し、また国家を形成し支えている人種の中核が維持される限り相変らず存続したことは再三再四にのぼる。数百年來、ロシアはその上級の指導層にいたこのゲルマン民族の中核のおかげで存続してきた。この中核は今日ほとんど跡かたもなく根絶され抹消されたと思ふことができる。その代りにユダヤ人が登場した。ロシア人自身にとって、自己の力でユダヤ人のくびきを振り払うことが不可能であるように、ユダヤ人にとつてもこの強力な国家を永い期間にわたって維持することは不可能である。ユダヤ人自身は組織の構成分子ではなく、分解の酵素である。東方の巨大な国は崩壊寸前である。ロシアでのユダヤ人支配の終結は、国家としてのロシアの終結もあるだろう。われわれは、運命によつて民族主義的人種理論の正当さをきわめて強力で裏書きするに違いない一大破局の目撃者となるよう選ばれている。

だが、われわれの課題、国家社会主義運動の使命は、わが民族の将来の目標が新しいアレキサ

ンダー遠征といつた心を酔わせる感銘で実現されたと思なされてはならず、剣によつてのみ大地が与えられうるとしても、むしろドイツのすきによる勤勉な労働にこそ将来の目標があるのだ、という政治的洞察をわれわれ自身の民族が持つようさせることにある。

* ビスマルクの対ロシア政策

ユダヤ人がそのような政策に対して、きわめて激しい抵抗の意志を表明することは自明である。かれらは他のだれよりも、この行為が自分自身の将来に対してもつ意味をよりよく感じている。外ならぬこの事実こそ、あらゆるほんとうに国家主義的な考え方をしている人々に、このような新しい方向つけの正当さを悟らせてもよいはずである。だが残念ながら、事態は反対の方向に進む。たゞドイツ国家人民党ばかりでなく、「民族主義」的な仲間の中にさえ、このような東方政策の思想に対する熱烈きわまりない挑戦者が現われるが、その場合、同じような状況になるとほとんど例外なく行なわれるように、かれらはずつと偉大な人物を証人として引き合いに出すのである。ナンセンスであると同様不可能であり、ドイツ民族にとつては危険きわまりない政策をかばうために、ビスマルクの精神が引用されるのだ。ビスマルク自身はかつてつねにロシアとの友好関係を尊重していた、とかれらはいふ。それは絶対に正しい。しかしかれらはその場合、次のことについても述べなければならぬことをまったく忘れていた。つまり、ビスマルクがたとえばイタリアとの友好関係にも同じように大きな願慮を払っていたこと、いやそればかりか、このビスマルクという同一人物がかつてイタリアと同盟したのはオーストリアをより楽に仕末できるということのためであつたことに、言及するのをまったく忘れ

だが、われわれが今日ヨーロッパで新しい領土について語る場合、第一にただロシアとそれに従属する周辺国家が思いつかれるに過ぎない。

この場合、運命自体はわれわれに暗示を与えようと望んでいるかのように思われる。ロシアはホルシェヴィズムに引き渡されたことにより、それまでこの国家を存立させ、またその存立を保証してきた知性がロシア民族から奪われてしまった。なにしろロシア国家の構造組織はロシアにおけるスラブ民族の国政能力の結果ではなく、むしろ低級な人種の内部に存在するゲルマン民族的要素による国家形成活動の驚くべき一例であるに過ぎない。地上の数多くの強国はこのようにして建設されたのである。ゲルマン民族の組織者や支配者を指導者にもつ劣等民族が巨大な国家構造に膨張し、また国家を形成し支えている人種の中核が維持される限り相変らず存続したことは再三再四にのぼる。数百年來、ロシアはその上級の指導層にいたこのゲルマン民族の中核のおかげで存続してきた。この中核は今日ほとんど跡かたもなく根絶され抹消されたと思ふことができる。その代りにユダヤ人が登場した。ロシア人自身にとって、自己の力でユダヤ人のくびきを振り払うことが不可能であるように、ユダヤ人にとってもこの強力な国家を永い期間にわたって維持することは不可能である。ユダヤ人自身は組織の構成分子ではなく、分解の酵素である。東方の巨大な国は崩壊寸前である。ロシアでのユダヤ人支配の終結は、国家としてのロシアの終結でもあるだろう。われわれは、運命によって民族主義的人種理論の正当さをきわめて強力で裏書きするに違いない一大破局の目撃者となるよう選ばれている。

だが、われわれの課題、国家社会主義運動の使命は、わが民族の将来の目標が新しいアレキサ

ンダー遠征といった心を酔わせる感銘で実現されたと思なされてはならず、剣によってのみ大地が与えられうるとしても、むしろドイツのすきによる勤勉な労働にこそ将来の目標があるのだ、という政治的洞察をわれわれ自身の民族が持つようにさせることにある。

ビスマルクの対ロシア政策

ユダヤ人がそのような政策に対して、きわめて激しい抵抗の意志を表明することは自明である。かれらは他のだれよりも、この行為が自分自身の将来に対してもつ意味をよりよく感じている。外ならぬこの事実こそ、あらゆるほんとうに国家主義的な考え方をしている人々に、このような新しい方向づけの正当さを悟らせてもよいはずである。だが残念ながら、事態は反対の方向に進む。ただドイツ国家人民党ばかりでなく、「民族主義」的な仲間の中にさえ、このような東方政策の思想に対する熱烈きわまりない挑戦者が現われるが、その場合、同じような状況になるとほとんど例外なく行なわれるように、かれらはずっと偉大な人物を証人として引き合いに出すのである。ナンセンスであると同様不可能であり、ドイツ民族にとって危険きわまりない政策をかばうために、ビルマルクの精神が引用されるのだ。ビスマルク自身はかつてつねにロシアとの友好関係を尊重していた、とかれらはいう。それは絶対に正しい。しかしかれらはその場合、次のことについても述べなければならぬことをまったく忘れていたのだ。つまり、ビスマルクがたとえばイタリヤとの友好関係にも同じように大きな顧慮を払っていたこと、いやそればかりか、このビスマルクという同一人物がかつてイタリヤと同盟したのはオーストリアをより楽に仕末できるということのためであったことに、言及するのをまったく忘れ



角川文庫

—3144—

完訳 わが闘争

(下)

アドルフ・ヒトラー
平野 一郎 訳
将 積 茂



角川書店

